

## 災害復興期における地域の記憶継承・アイデンティティの再編

○早稲田大学 浦野正樹  
早稲田大学 川副早央里  
早稲田大学大学院 野坂真

### 1. 問題意識とその背景

本研究は、「応急対応→復旧・復興対応→(次の災害への)長期的な被害抑止→被害軽減の対応→災害発生時の緊急対応→…」と循環する減災サイクルのフレームのうちで、とくに地域の社会生活の基盤を再建し自然災害等への一定の安全・安心感を担保しながら地域社会が存続していきける生活のしくみを編み出し社会関係を再構築していく時期にあたる〈復旧・復興期〉に焦点をあてて、その時期の社会諸課題に取り組むプロセスを、地域結束力の源泉となり精神的な基盤ともなる〈地域の記憶継承〉や〈地域アイデンティティの再編成〉との関係で実証的に明らかにし、復旧・復興期の社会過程の理解を深めようとするものである。災害からの復旧・復興過程では、「生活の早期の復旧&再建をいかに実現するか」と「地域生活の安全・安心をどう担保するか」が大きな課題となるが、現実の地域の社会過程ではこれらは往々にしてアンビバレントな関係に陥り、事業計画者と住民間、住民相互での合意形成が難しく復興事業が地域ニーズに合わなくなったり利害対立が激化し地域の社会関係が崩れたりしていく。復興事業が地域社会全体の存続を危うくし結果として地域生活を崩壊させ人々を離散させて地域の活力を奪うのであれば、地域社会にとって、復興事業の効果はない。

本研究では、地域社会の存続を基底から支える地域文化の領域に目を向け、それが地域社会関係や地域生活を維持していくしくみの構築にどのように波及していくかに着目したい。地域社会の価値や存在意義は何かなどの問いかけを踏まえ、地域での継続的な生活を支える地域ビジョンや展望を創り出し共有していく試みは、単なる地域理念の共有にとどまるのではなく、実践的な地域活動を通じて、地域の人間関係のネットワークの再編成や生き方の模索・再構築に繋がっていく。地域の記憶継承やアイデンティティの覚醒は、その試みのコアの部分に位置づけられよう。

### 2. テーマの設定と研究フレーム

本研究では、とくに東日本大震災の被災地域をとりあげて、こうした地域の文化領域の問題が、地域活動の社会関係のネットワークの再編や地域での〈なりわい〉のスタイルの模索や雇用機会の創出等と繋がってくる位相を明らかにしようとするものである。現在、東日本大震災で被災した地方都市とその周縁の地域圏では、とくに周縁部にあたる地域において地域の存在意義が疑われ地域での〈なりわい〉のスタイルが崩れて存続の危機に瀕している。コンパクトシティの考え方などにより、地方都市の中心部に機能集約をして周縁部の諸集落をさらに作為的に整理することが果たして地域全体を持続可能にすることに繋がるのか。その作為が結果として周縁部の集落において蓄積してきた個性や魅力を喪失させ、それを背景にして生成してきた地方都市の個性や魅力が薄らいでしまえば中心部を含めて地域全体が地盤沈下し衰退してしまう。地方都市圏の周縁部にあたる地域の人々にとっては、地域の記憶継承・アイデンティティを再編しつつ地域活動の社会関係のネットワークを発展・変化させ、地域固有の特徴や個性を生かして生活を支えるしくみを維持・開発し、都市圏の中心部と健全な関係を保ちながら地域生活が存続できるしくみを構築することが重要になるが、本研究はそうした地域での人々の取り組みとその過程を明示的に取り上げ意義づけることで、復旧・復興期における文化領域と経済・社会領域の複雑で深奥な関係への理解を深め、復旧・復興期における復元回復力と取り組みを評価する糸口を探ることを目指している。

今回の報告群では、具体的な調査対象地域として、福島県いわき市と岩手県大槌町に焦点を当て、東日本大震災前後の災害過程において、地方都市圏内の中心部と周縁部の関係から生じている諸事象に影響を受けている地域を取り上げる。周縁部の地域にとって結束の核となると同時に、中心部の市街地にとっても地方都市圏全体の魅力や独自性を形作る一要素となるであろう、地域の集合的記憶や地域アイデンティティの源泉が何かを探求する。これは地域社会の復元回復力(resilience)の概念をより明示化する試みでもある。